

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 327



1999 FEBRUARY



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

アルタイ (中国側) の最高峰へ行きましょう

中国、モンゴル、ロシア、カザフスタン四国にまたがる「アルタイ」山脈は、約2000kmにも及ぶ大山脈です。その最高峰はロシア側にあります。今回は、中国、モンゴル国境付近にそびえ立つ「友誼峰・4,374m」が目標です。モンゴル側では古くから「タバン・ボグド」と呼ばれ、その主峰は「フィティン・4,422m」とされています。

モンゴル側からは、何登もされている山ですが、中国側からは「未踏」です。かつて1988年に開高健が巨大魚を求めて探索した「ハナス湖」を船でわたり、更に奥に分け入りこの主峰を目指してみませんか。興味のある方は、H A J事務局へ連絡下さい。

記

1. 日時：1999年7月24日(土)から28日間程度
2. 募集人数：約10名
3. 費用：65万円



引き続き募集中!!

カバン峰 (6,717m) 未踏峰

チョム・カンリ (7,048m)

ニンチン・カンサ (7,206m)

表紙写真

約3週間の長いキャラバンの末、サイバル北面へ入山した。北サイバル氷河へ入ると、サイバル北面の姿を望む事が出来た。氷河内院を馬蹄形に囲む様に稜を伸ばしたその姿は、まさに「白き城壁」であった。

チーム・サイバル'98 野沢井 歩

ヒマラヤ No.327

1. 西ネパールの白き城壁 サイバル (7,031m) 北面の記録

チーム・サイバル'98

野沢井 歩

16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・CD-ROM・Books〉

20. 日本隊によるヒマラヤ高峰初登頂

山森 欣一

22. 1999年インドの主な祝祭日

23. 中国高峰登山15年小史(20) 西藏その6

24. 寸感・事務局日誌

『西ネパールの白き城壁』

サイパル (7,031m) 北面の記録

チーム・サイパル'98 野沢井 歩

はじめに「西ネパールへの着想」

私にとって、はじめてのヒマラヤ登山は、91年のマカルーであった。その時の長いアルン谷のキャラバンは、雨の中、ジュガ(山蛭)に血を吸われながらも、今まで体験した事の無い非常に楽しい山旅であった。こうしてすっかりネパールの魅力にハマッてしまった私は、以来毎年ネパール通いが続いている。

しかし、私はここ近年ネパールではトレッキング・ピーク登山やトレッキングが主で、ネパールでのエクスペディションは久しぶりである。それはネパールの登山料の大幅値上げ、リエゾン・オフィサーを始め、現地スタッフ等に掛かる費用の高騰など、毎年ヒマラヤへ行こうと決め、それを実行する上で、ネパールでのエクスペディションは金銭的に非常にきつからであった。

又、現在ネパール・ヒマラヤに限らず、ヒマラヤへの多くの登山隊は、プ・モリ、アマダブラム、といった、アプローチが楽で形の美しい有名な山や、サガルマータに代表される8,000m峰のノーマル・ルートに集中しているといえる。これらの山々は登山隊が入り乱れ、ルート工作をどこが行なうか、ロープは、ラッセルは…と様々な問題を引き起こしている。

今回私達は3人で行なう登山であるので、自分達だけの力で登る登山を行ないたいと思い、他に登山隊のいない山を選ぶ事にした。

又、人気の山々のアプローチ・ルートとなる、エベレスト街道、アンナプルナ周辺などは、多くのトレッカーが訪れ「ヒマラヤ=辺境の地」といっ

た図式は成り立たない様に感じる。そういった観念からアプローチもトレッカーのいないエリアに傾倒していった。

800kmを有する、ネパール・ヒマラヤである。まだまだ登山隊の入らない静かな魅力ある山々が多く残されている。

特に西ネパールの山々は、高さこそ標高6・7000m級ながら、アプローチも含め面白そうなエリアである。こうして私達は西ネパールのエリアに興味を持ち始めたのであった。

しかし、やはりヒマラヤを目指す以上「高さ」に対するこだわりも捨て切れない。ネパール・ヒマラヤでは、ダウラギリ山群以西では、アピ(7,132m)、アピW(7,100m)、サイパル(7,031m)の3座の7,000m峰がある。こうして、私達はこの中からサイパルを目標の山とした。

サイパルという山

サイパル山群は小さな山群である。南面は、主峰を中心に、サイパル氷河を馬蹄形に囲む形で、山稜が伸び、北面も同じ様に、馬蹄形に北サイパル氷河を囲む形で山稜が続いている。主峰の他、サイパル東峰、フィルンコフなどの山がある。

サイパルの登山史を簡単に記載してみる。

1953年秋、私の最も尊敬する登山家、オーストリア人のH. ティッヒーによって、長い西ネパール横断の旅の最後として南面が踏査された。

初登頂は1963年秋、同志社大学隊によって南稜から成された。その後じつに22年ぶりの1985年秋、スペイン・フランス隊によって、南西壁アルパイン・スタイルと、南西壁～西稜ルートからと相次

いで登頂された。

北面側は1990年秋、北東稜ルートより、スイス・フランス隊、オーストリア・ドイツ隊の2隊によって登頂された。

サイパルは何故か初登以来、日本隊の入山記録はない。せっかく行くのであるのだから、まだ日本隊の挑戦の無い北面側を探ってみようと決め準備を始めた。

アプローチ

サイパルの南面に入るアプローチは、ダンガリよりダンデルドーラまで車道が伸びている。そこからセティ川沿いよりガート・コーラに入り、9日間のキャラバンでサイパル氷河上のBCに入る事が出来る。この南面のアプローチ・ルートはトレッキング・ガイド書などにも紹介され、比較的情報が豊富なのだが、それに比べ北面に入るアプローチ・ルートは情報が少ない。

今回この北面ルートのアプローチを採るに際して、今秋、同じく西ネパールを目指し、ネパール通でもある「大阪山の会」の大西氏より地図、情報、アドバイスを頂き、情報不足の北面のアプローチに大きく役立った。

私達は登山もさる事ながら、下（アプローチ）も楽しみたいという大きな目的が有るため、カト

マンズより陸路を使っでのアプローチとする事に決める。

カトマンズよりスルケットまでバス。そこからポーターによるキャラバンを始め、ダイレク〜ジュムラ〜ララ湖の東、ガムガリ〜シミコット〜サイパル北面BCといったルートである。

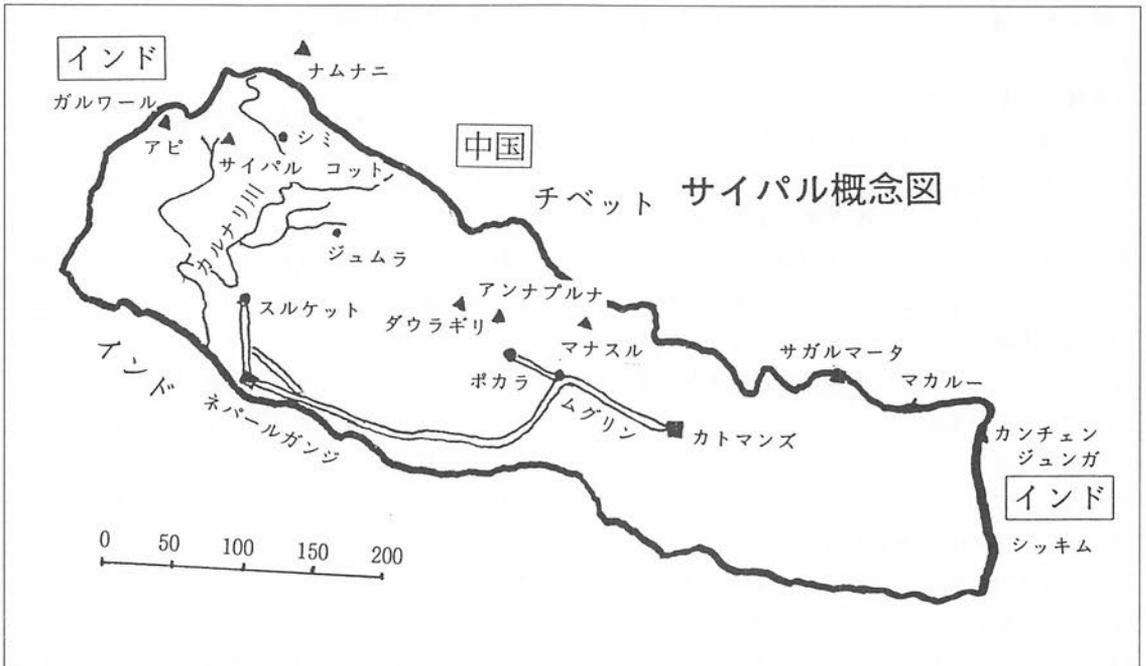
昔の登山隊に比べると、まだまだ甘いかもしれないが、カトマンズよりサイパル北面BCまで約3週間、胸踊る楽しいプランである。

最近、ヘリでBCまで入山する隊も多いが非常にもったいないように思う。

サイパル北面の入り口となる、フムラ地方はこの春、飢饉に襲われ、食糧が不足しているらしい。カムバ・ゲリラが暴れているなど物騒な情報も流れている。又、西のポーター事情が悪い事などから、ローカル・ポーターは全員カトマンズより連れていった。

この長いキャラバンをのりきるため、136リットルの石油を準備した。それに伴い丈夫な日本製の石油ポリタンも準備した。

又、個人装備、BC使用分の食糧は「タル」を使用したため、雨の多いモンスーン期のキャラバンでも安心できた。





サイバル・キャラバンルート図

作図：野沢井 歩

登山基本計画

登山方法は、メンバー3人自分達の手で登山がしたいので、シェルパ・レス。ハイ・キャンプはテント1張りを随時移動させる、といった方法で荷物の軽量化を図る。そうすることにより自然と個装も軽量化されて行く。しかし今回ルートが解らない為、FIX用のロープ50m×8本を用意した。

現地スタッフは、サード兼コックとキッチン・ボーイだけを雇う。食糧も現地食中心。今回食糧担当は、この道のプロ、岩崎氏であるため、食糧の買い出しは、コック相手に厳しくチェックされた（現地食中心なので、ダル・バートが苦手だと少々きついかも、しかし酒に関しては甘いとの声も）。

このような方法だと荷物を減らせ、小回りも利くし、結果資金の削減にもつながった。

隊の構成

隊長 野沢井 歩 (34歳)
隊員 岩崎 洋 (38歳)
隊員 古谷 朋之 (25歳)
LO アリカリ・ラダ・クリシュナ (38歳)
サード兼コック デビラム・バラジュリ (38歳)
KB ディビ・ライ (37歳)
ローカル・キッチン 2名
ローカル・ポーター、往路22名、復路5名

キャラバン

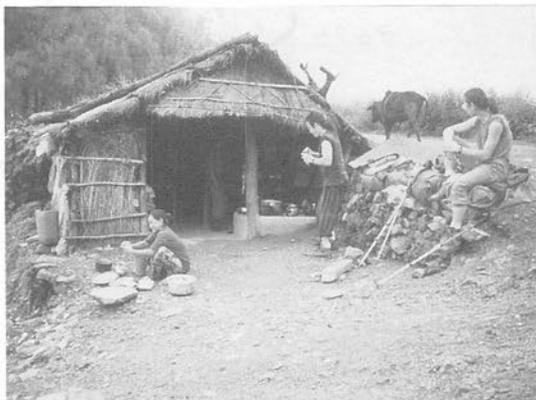
8月18日～24日 野沢井、岩崎はバンコク経由、古谷は関空ダイレクト便にて、全員カトマンズに集結する。タメルの一入100RS (200円)の宿所に落ち着き、準備を始める。

出発時の円安により両替では非常に損をしてしまった。闇両替より銀行で替えたほうが換金率は良いくらいだ。

しかしLOの装備代等が予想以上に安くあがったのはラッキーであった。又、今年は殆どのLOがBCまで同行した。(当たり前だが)

装備、食糧、燃料を梱包すると、24個の荷物となった。それを22人のポーターで運んでもらう。

▼キャラバン途中のバッチィ



全員カトマンズから連れて行くため、食糧、燃料が減っても途中解雇無し、全員BCまで連れて行くという約束である。

又、長い西ネパールのキャラバンという事を考え、ローカル・キッチンを2名雇い入れた。

8月25日 チャーターしたミニ・バスにメンバー、LO、スタッフ、ポーター、隊荷を満載しカトマンズを出発。

奇しくも同時に出発となった山野井夫妻のマナスル隊とバスを並べ、ムグリンまで一緒にと考えていたが、我がLOの遅刻のために我々のバスは30分程の遅れで出発。

ネパールではバスの止まるドライブ・インのダル・バートがうまい。特にムグリンのダル・バードを楽しみにしていたのだが、昼食前という事で通過してしまったのが残念であった。

ムグリンからポカラへの道と分かれ、南下。ナラヤンガートで川幅が広がったトリスリ川を渡り、タライ平原を西へ向かう道路へ入る。

25日は「ハリタリカ」と呼ばれる女性だけの祭りの日で、至る所で着飾った女性の歌声、ダンスが繰り広げられていた。

タライ平原を西に向けひた走る。夕陽に向かい走るバスは、西へ向かう臨場感溢れるシーンである。夜は蛍の群れが美しかった。

この時期、雨季の影響で道路の決壊が心配されていたが、何とか順調に進んでいった。しかし後40kmで無事スルケットへ到着かと思いきや、立ち往生のトラックと遭遇。結局スルケットからのバスに乗り換え26日到着。

▼ダイレクの街並



スルケットは山間の盆地状の街で、標高800mなので非常に暑い。それに加え、このエリア一带はドライエリアのため、街で酒類の入手は困難である。幸い私達の宿にはビールを140R Sという高値だが置いていた。この先ビールが飲めそうにないので、ここで十分に補充しておく。

8月27日 いよいよ長いキャラバンの始まりである。

スルケットよりダイレクまでは車道建設中という事もあったか、道幅も広く、人々の往来も多い。とは言ってもエベレスト街道、アンナプルナ周辺とは違い、やはりトレッカーなどの姿は皆無である。途中のバッチィーもローカルなもので、ミネラル・ウォーター、コーラなどのたぐいの物は勿論無い。しかもこの暑さなので、生水をガブガブ飲めないとこのキャラバンはやっていけない。幸い、特に腹をこわす者はいなかった。

8月28日 この日も非常に暑い。炎天下の中、バテバテとなってダイレク着。この街はいわゆる宿場町といった感じの大きな街で、道沿いに商店、旅館などが立ち並ぶ。

8月29日 ダイレクを過ぎるとグッと人々の往来も減り、石楠花林の多い山道と変わる。小さな山の登り返しを繰り返す。しかし標高は依然上がらず、暑い中キャラバンは続いた。沢があると決まって水浴び兼洗濯となる。

キャラバン当初苦労したその日の昼食場所、宿泊場所の決定も次第にリズムが掴める様になってきた。(カトマンズ・ポーターは都会生活に冒されているのか、出発当初は、連日半分のポーター

しか宿泊地に到着できない状態であった。)

天候も比較的安定していたため、心配していたジュガ(山蛭)もそれほど多くない。

8月30日 久々の雨。石楠花林の道をジュガに注意しながら進む。途中のバッチィーも更にローカルな感じとなり、道も細くなってきた。

尾根道をぐんぐん登り、メンバー、ポーター共々ヘトヘトになって草原状の美しいマーンブ・パス(3,800m)を越えた。この峠の下には、温泉があると聞いていたが、ただの馬小屋が有るばかりであった。

8月31日 マーンブ・パスを下り、粟、麦畑の広がるディリコットの村となる。再び高度を大きく下げたため暑いキャラバンとなる。

ルルボック・コーラ沿いを進み、小さな峠を登りきると、エルチッカ村に到着。村の学校にテント泊。外国人が珍しいのだろう、私達のテント場には多くの村人が訪れ、特に日暮れまで続く子供の相手には苦労させられた。

9月1日 終日雨。エルチッカより田園の畦道なのだが、一見「雲の平」みたいな美しい風景が広がる。

この辺りは私達の持参したマンダラ・トレッキングマップ、通称「青焼き地図」では随分とルートが違っていた。やはり現地の人から情報を得るのが確実だが、時間に関しては目茶苦茶であった。しかし時計の無い生活を送っているので当たり前かもしれない。

ジュムラへと続く、ティラ・コーラへと入る。しかし途中からティラ・コーラから離れ近道となるシンジャ・コーラ沿いへとルートを変える事に

▼シンジャ・コーラとティラ・コーラの分岐



▼橋に施された掘り物



する。この谷に入る日本隊は初めてであろうか？
このあたりに掛かる橋には、カトマンズの骨董品屋に並ぶ様な、人の顔の彫り物が施され興味深い。

ティラ・コーラ、シンジャ・コーラの分岐点の村ナグマ泊。

9月2日 シンジャ・コーラへ入ると、民家の屋根もチベット風な平屋根と変わってきた。ダル・バートの米は赤米である。谷は開けのどかな風景が展開する。この辺りはトイレの無い村が多く、道端は牛糞、人糞、それにたかる蠅には閉口した。

この季節、予想以上に野菜、果物も豊富で、特にリンゴは1つ50パイサ(約一円)という安さであった。

9月3日 シンジャ・コーラ沿いのルートは途中、ララ湖西側、ジュムラ、そのままシンジャ・コーラを詰め、ララ湖とジュムラを結ぶルートに出る、といった3ルートに分かれる。そこで、ポーター、地元の人も巻き込み協議となる。結果シンジャ・コーラのルートに決めた。このようにその日その日でルート変更が可能なところが、西ネパールならではの魅力である？

シンジャ・コーラは次第にゴルジュに溪相を変えると、ジュムラとララ湖を結ぶトレッキング・ルートへ出る事が出来た。

日暮れ近くチョウタ着。しかしポーターは9時過ぎに全員到着。こう連日遅れがちでは、これからも心配であるため、ナイケ(ポーター頭)には4時までには到着出来る様、1日の行動距離を短く

▼赤米のダル・バート。カラーでお見せ出来ないのが残念！



する様指示した。

9月4日 緑の中のチョウタ・コーラ沿いのルートをグルッチ・パスを目指す。そしてこのルート上で始めてトレッカーに出会う。

草原の美しいグルッチ・パス(3480m)を越えるとララ湖東の大きな街ガムガリである。この日、時間的にガムガリまで充分なのだが、先日ナイケにクレームを言ってしまった手前、途中のピナ泊となってしまった。

9月5日 本日はガムガリまでの半日行動である。

ララ湖まで2時間という場所なので観光にでも、と思っていたのだが、結局だらだらと過ぎてしまった。又、同じく西ネパールの山を目指している、「大阪山の会」隊の本隊到着を待つ柳原氏と偶然にも再会。

夜はスタッフ、ポーター達を連れ、久しぶりのチャンにありつく。

▼明るく開けたシンジャ・コーラの谷



▼美しい、グルッチ・パス



今回雇用したポーター達22人とはすっかり顔も覚え打ち解けてきた。安藤さん、星野君、など知り合いの山仲間に顔が似ている連中も多く、それが彼らのニックネームとなっていた。

9月6日～当初ガムガリより大きな山越えのある尾根筋のルートでシミコットへ向かう計画であったがローカルの人々のアドバイスで、ムグ・カルナリ川に沿って下り、スルコット峠(2,480m)を越え、フムラ・カルナリに出る。この川は大きく屈曲している為、メタ・パス(3,480m)を越えショートカット、再びフムラ・カルナリ川へ降り立ち後は川沿いをシミコットまで進む、といったルートへと変更した。

ムグ・カルナリ川沿いの道はアップ・ダウンは少なく助かるが、道はさらに心細くなってきた。植物も相変わらず多い、イラクサ、ガンジャ?の群生その他サボテンも現れてきた。又、セパロと呼ばれるトカゲが多い。60cm級の「オオトカゲ」

▼キャラバン中のキャンピング



に遭遇し、肝を冷やした事もあった。西ネパールではなにがいてもおかしくない。

村の数も減り、ポーター達の食糧を調達するのも大変になってきた。

ムグ・カルナリ川沿いのスヌムレという村では、着飾った女性達による、女性だけの祭り、「ハリタリカ」に似た祭りが行なわれていた。女性達は、海から遠く離れたエリアだからか、貝殻を使ったアクセサリーをよく見かける。

9月7日 ムグ・カルナリを離れ、スルコット峠(2,480m)を越えると、フムラ・カルナリ川へと降り立つ。川沿いの村トソツェは村人が皆放牧へ出掛けているらしく、まるでゴースト・タウンの様である。ポーター達の食糧の入手が更に心配な所であった。

9月8日 フムラ・カルナリへ出て、この川の屈曲点をまたぐように、メタ・パス(3,480m)を越える。この峠越えは、西特有の直登ルートで今回一番の大登りとなった。途中道を間違ったりのハプニングもあったが無事峠を越えた。

その峠からは、わずかながらフムラ地域北側のヒマラヤを眺める事が出来た。こんなに歩いて来てやっとという感じである。

キノコの多い松林を下りグンサ村泊。ここでは村人が薬、治療を求め多くの村人が私達のテントを訪れてきた。

9月10日・11日 再びフムラ・カルナリ川に降り立ち、川沿いのルートをシミコットへ向けて進む。ここからはあまりアップ、ダウンの少ない川沿いの道が続く。

▼ガムガリの街並



▼ムグ・カルナリ川沿いのキャラバン



途中、フムラ・カルナリ川にチャン・ラより流れ出るドザム・コーラが合流。

シミコットはフムラ・カルナリ沿いより2時間も登る高台にある街である。

この街は、フムラ地方最大の街で、飛行場をはじめソーラーによる電気、電話もある。街の商店には中国製品も溢れ、私達の投宿したのは「ホテル・マナサロワール」。チベットに近づいてきた臨場感が味わえる。

飛行場にはインド国境近くのネパール・ガンジなどからロイヤル・ネパールのレギュラー・フライトが週3便就航されている。その他、米などを輸送しているネコン・エア便が毎日飛んでいる。このような情報はカトマンズでは入手出来ないので行ってみて始めて解る情報である。

又、最近このエリアがトレッカーにオープンされた事で、今後カイラスへのトレッキングの基地としてシミコットも随分変わってしまうのだろうか？。

しかし飛行機で一時間あまりの所を二週間かけて歩いてきたのはある意味では贅沢な事なのだろう。

▼スナムレ村の女の子



シミコットでは、今キャラバン初めての1日レストとする。久しぶりに飲むビール、チャンは大変美味かった。

9月12日 いよいよサイパルの北面のBCを目指す。

シミコットより所々ゴルジュとなるフムラ・カルナリ川を大きく高巻く様に左岸側を溯る。

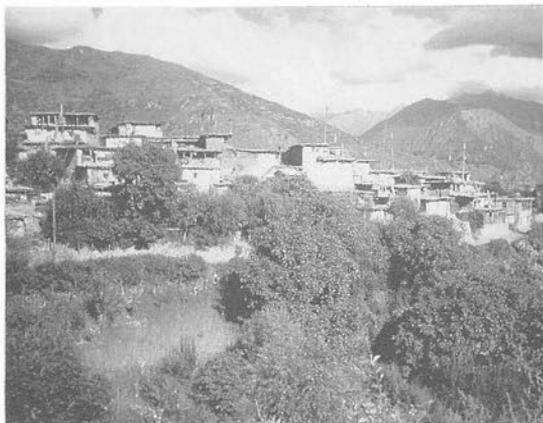
途中チベットから塩を背負う山羊の隊商とすれ違い、チベットの近さを実感する。それにしても非常に蠅の多い所で辟易させられた。

フムラ・カルナリ川は、チュンサで北よりチュンサ・コーラ、南よりカワ・ルンバが流れ込みいわゆる十字峡となる。サイパル北面へはこの十字峡を南より流れ込むカワ・ルンバへと入る。今回この十字峡がうまく渡れるかが大きなポイントであった。なぜなら私達の持っている地図では、十字峡に橋が無く、大きく迂回する様になっていたのだ。もし迂回する様であると2～3日のロスと

▼ガンジャの基?の群生



▼シミコットの旧市街



なってしまう。しかしやはり現地に来てみるもので、この十字峡には立派な橋が架けられていた。こうしてサイバル北面の入り口へと入る事が出来た訳である。

しかし、私はこの日、蚊に刺された足の甲を、蠅にたかられたためか、菌が入り股の付け根のリンパまで腫れ発熱。一時どうなる事かと心配だったが、抗生物質のおかげで事無きをえた。

十字峡の河原泊。

9月13日 カワ・ルンバの谷にはさらに北サイバル氷河より流れ出るカンラ・コーラが注ぎ込む。

私達の目指す北サイバル氷河末端のBCはこのカンラ・コーラ沿いにルートを探る。

このカンラ・コーラ手前にはチャラという「ラマ族」の村が有る。なんとここでは、麦チャン、ジャガイモの入手が可能で、しかも帰路のポーター確保も大丈夫との事。BCから一日内にこういった村があるのは有り難かった。

▼チベットからの山羊の隊商



▼シミコットの新市街と飛行場



大きく高巻く様に進むカンラ・コーラ沿いのルートは美しいお花畑となった草原であった。

「青焼きの地図」によると、途中トトリヤ・カルカという地名が記載されているのでここを目指す。しかし実際その地名は、クワリ・コーラに至るルート上にあるらしい。どうもこの地名を元に情報を集めようとするのだがローカルの人々から聞く話と食い違う訳である。カルカ泊。

9月14日 いよいよBC入りである。

カルカを出発し、川沿いにルートを探り進む。4時間程詰めた、カンラ・コーラ左岸、北サイバル氷河舌端近くの草原状の台地にBC(4,200m)を建設した。

カトマンズ出発からじつに20日目の到着であった。さすがにポーター達も再び歩いて帰るのには辟易したらしく、なんと全員シミコットより飛行機で帰っていった。

▼最奥の村 チャラ



▼BC (4,200m) 全景



登山活動

私達の建設したBCは、お花畑の草原状で、すぐ近くには飲料水となるきれいな沢が流れ、トイレも水洗である。そしてなんといっても、この美しい土地は、他の登山隊のいない、私達だけの静かな村となったのがうれしい。ここは以前の登山隊がBCとした形跡も無かった。

一応BCらしく、タルチョーをはためかせ、プジャ（安全祈願）も行なった。しかし今回スタッフにシェルパ族はおらず、（これが本当のシェルパレス？）見よう見まねの怪しいプジャとなってしまった。

北サイパル氷河を詰める

9月17日～登山開始。まずサイパルへ取り付く為には、北サイパル氷河を溯らなくてはならない。氷河舌端より取り付き、氷河上のモレーンを進む。途中のアイス・フォールを避けるため氷河の右岸沿いに上がる急なガレ場を登る。側壁と氷河右岸沿いのコンタクトラインにルートを探るが、途中クレバスに阻まれたため、側壁を一段上に上がるとそこはお花畑となったアブレーション・バレーとなっていた。この美しいルートを進む。前方には城壁の様に立ちのぼるサイパルが望める。やがてルートは側壁に吸い込まれてしまうため、再び氷河上のモレーンを進む。ケルンを積みながらルートを設定し、サイパル間近の氷河上のモレーン上4,800mをC1とする。

▼西ネパールに現れた、あやしい登山隊



ルート工作、敗退

9月19日 しばらくBCでレストし、C2へのルート工作へと入る。

サイパルの北面は北サイパル氷河の源頭部を囲む形で北東稜と西稜が馬蹄形に尾根を伸ばしていた。西稜は、フィルンコフ（6,736m）との間にコルを作っている。そして、そのコルから北サイパル氷河に向かいアイス・フォールを落としている。私達はこの西稜のコルに上がるルートを探る事とした。

C1に向かうアブレーション・バレーより見るこのアイス・フォールは、楽に突破出来るであろうと楽観していた。その後やはりヒマラヤ、スケールの大きさを感じさせられる事となるのだが……。

9月20日 アイス・フォールの左岸にルートを探り取り付く。氷河の氷にアイゼンを軋ませ上部へ登る。初め快適であったルートは、上部に登る

▼BCに作った水洗トイレ



につれ、セラック帯となり、不安定なスノー・ブリッジにロープをFIXし渡る事となる。ルートは、次第にそれを避けるため、クレパスの埋められている、ブロックのデブリの方へと追いやられてしまった。やはりデブリ（しかも新しい）上をルートに採るのに抵抗があったのと、さらに上部はビルディングの様なセラック帯に阻まれている。結局このルートを放棄、一旦C1に戻る。その直後にルート上を雪崩れが襲い胸を撫で下ろした。

その夜からなんとC1は雨。私達の唯一のテントはフライ無しなので、全身びしょ濡れ、惨めな夜を明かした。こうして心身共に疲れBCへ一旦引き揚げる。

モンスーンの影響の少ない、と言われる西ネパールであるが、やはり時期が少し早いのかさっぱり天候が安定しない。ルートも確定できずイライラする日々が続いた。

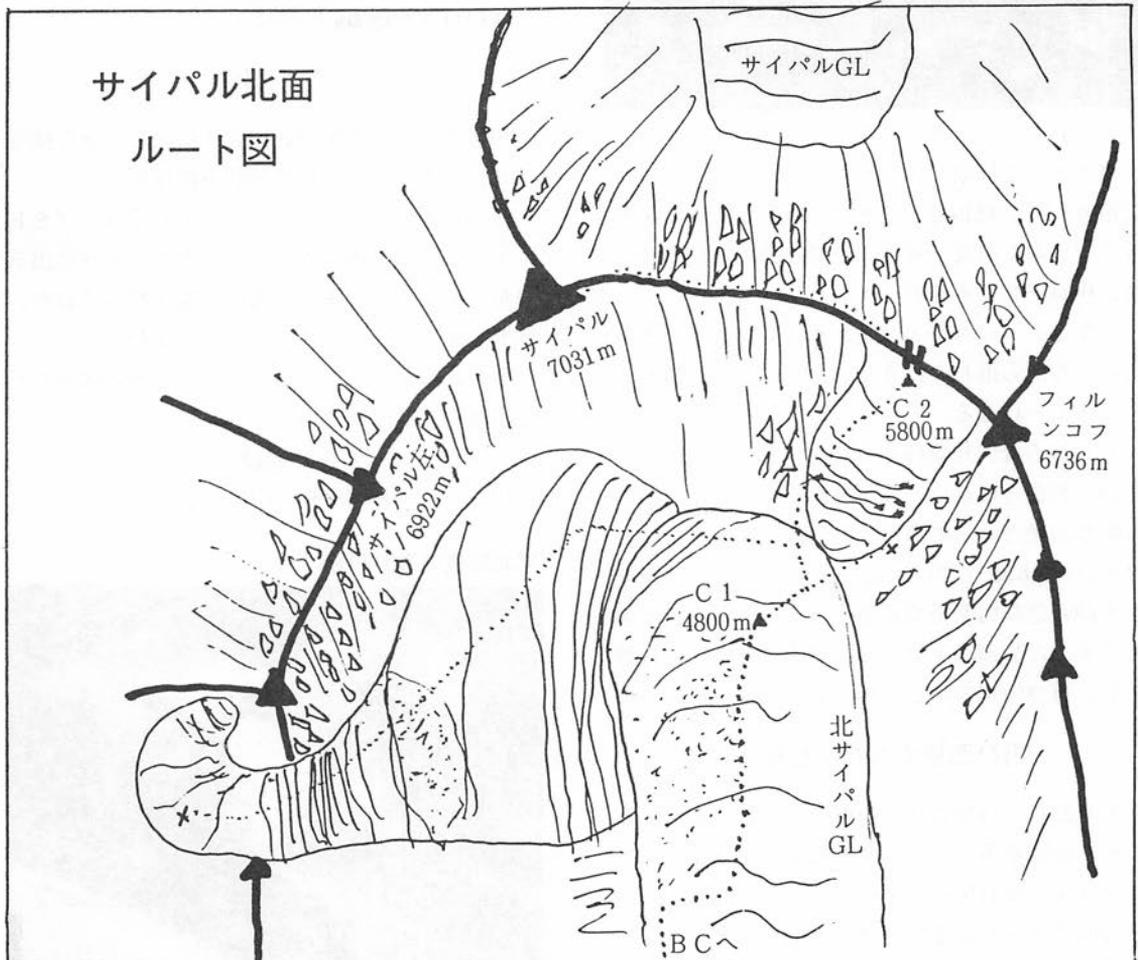
北東稜へ

9月27日～ 久々の好天。今度は北東稜にルートを採用する事とする。このルートは以前、北面から登られた唯一のルートである。しかしこの北東稜、末端まで取り付くのに2つのアイス・フォールを越えなくてはならない。しかもその間は広大なプラトーになっている。又、北東稜に上がってもそこから頂上までが大変長い。そうした事から、私達はこのルートを敬遠していたのだ。

9月28日 北東稜のルート工作に入る。

まず一つ目のアイス・フォールを抜ける。前回のアイス・フォールと比べ、傾斜が緩く、素直な氷河のため簡単に越える事が出来た。大きく開いたクレパスを避けながら、広大なプラトーへと進む。

やがてこのプラトーは途中モレーン帯となるた



▼ルートにとった、アイスフォール



め、一旦アイゼンを外さなくてはならない。

プラトールを横断し、二つ目のアイス・フォールに取り付く。傾斜はそこそこの氷壁をピオレ・トラクションで高度を稼ぐ。下降を考え、急な部分に途中ロープ2本をF i xした。

上部はクレパス帯となるため、ジグザグとそれを避けながら進む。こうして氷河は、雪に覆われたプラトール状なる。

ここからは、北東稜の末端を見る事が出来た。しかし想像とは違い、北東稜から伸びる支尾根は急峻な岩稜となって落ちており登れそうにない。ダイレクトに取り付くには、もう一つアイス・フォールを越え急な雪壁を登る事となる。どちらにせよ私達のこの装備とシンプルな登山スタイルでは難しい。再び失意の中C 1へと戻る。

再び西稜のコルを目指す

9月29日 再び最初の西稜のコルに出るためのルートを探る事とする。今度は前回とは反対のアイスフォール右岸沿いを攻める。

今回のルートは正解で、上手くアイス・フォールの弱点をつくルートを見つける事が出来た。し

かし後少して上部プラトールに出られるという所で、再び巨大ビルディングの様なセラック帯に捉まってしまった。このまま突き進むか、迷うが、右壁沿いに掛かる雪壁沿いにルートを探る。今回この右壁に取り付くためのスノー・ブリッジの通過が綱渡りの的で一番肝も冷やした部分であった。今回限りの限定ルートであろう。

そのまま、コルまでルート伸ばしたかったのだが、ガスが出てきたのと、時間もだいぶ経ってしまったのでC 1へと戻る。

帰路はクレパス帯の氷もだいぶ緩み、スノー・ブリッジの通過は恐ろしかった。

これで何とか上部プラトールを経てコルへの見通しもたったので、アタック前のレストとするためBCへと戻る。いよいよアタックである。

アタック体制に入りたいのだが、天候は相変わらず不順で、なかなかBCを出発できず、落ち着かない日々を送る。

アタックへ

10月3日～ 天候が好天周期に入ってきた様なので、アタックに向けてBCを後にする。

前回C 1からアイス・フォール帯はロープをF i xしておいた為スムーズに上部プラトールに出る事が出来た。コルまでは広い雪原となっており、ヒドン・クレパスに注意しながら進む。

コルからは美しいフィルンコフが手の届きそうな距離まで近づいている。

コル5,800mにC 2を建設。

10月5日 月明かりの中、午前三時出発。

▼北東稜の取り付き



▼フィルンコフ (6,736m)



天候は良いが風が強い。コルより急峻な雪壁となっている西稜を登る。稜は頂上に向けて盛り上がる様に伸びる。南西側は急な雪壁となって、サイパル氷河までスッパリときれ落ちている。そして対称的に北面側は大きく雪庇となって張り出している。

自然とこの南西側の雪壁にルートを探るのだが、一人滑落ただけでロープにつながった3人共下まで一直線である。

陽が昇ると、アピ山群を始めとする、西ネパー

▼アイスフォールを突破



ルの山々、そして来年計画中のチベットのナムナニ峰 (7,694m) をひときわ大きく望む事が出来る。やはりナラカン・カールの山群は見つけられない。

初登頂ルートとなった、ゴジラの背の様な急峻な南稜が頂上へ向け伸びている。それにしても同志社大学隊は、35年前よくこの稜を登ったものだと感心させられる程悪そうである。

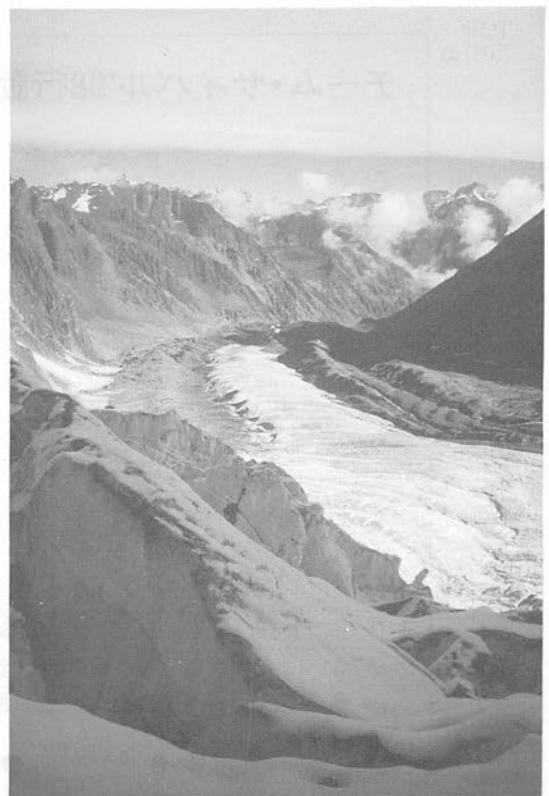
相変わらず風が強く、非常に寒い。途中でカメラが作動しなくなる程である。

何とか順調にルートを伸ばしてきたのだが、いよいよ最後の登りで行詰まってしまった。強風の中、ルートを探すか、下降の事を考えると結局妥当なルートを見出せなかった。風も強い。タイム・リミットを過ぎてしまった事も有り、一旦C2へと引き揚げる事とする。

下山途中、古谷が視力に異常を訴え、心配されたが時間を掛けなんとかC2に無事帰幕する事が出来た。

10月6日 次の再アタックに向けてレスト。前日の失敗の為、当初狙っていた、フィルンコフの

▼北サイパル氷河を俯瞰する



登山も諦める事となってしまった。

10月7日 再アタックである。

古谷はやはり眼に不安があるので諦め、二人でのアタックとなった。今回も南西から強風が吹いている。ルートは南西側をたどるのでこの風を避ける場所が無い。そのため3時にC2を出て一回も休む事が出来ず、9時まで6時間登りばなしであった。

そして前回の敗退場所よりルートを探る。今回も前回同様のルートを探るがやはりどうしても行詰まってしまう。二人の間に次第に諦めムードが漂い始めた。最後に前回、大きく雪庇が張り出していると思っていた北面側のリッジに廻り込むと、なんと雪庇でなく、ナイフリッジとなって上部へ続いていたのだ。私達はそこをコンテで強風の中黙々と登る。

一時間程登り続けると雪に覆われた頂上が近づいてくる。もうわずかという所で、岩崎さんは私にトップを譲り、先に頂上を踏ませていただいた。(12時19分頂上)。二人抱き合い、体を叩き合い喜び合った。久しぶりにうれしい登頂だった。

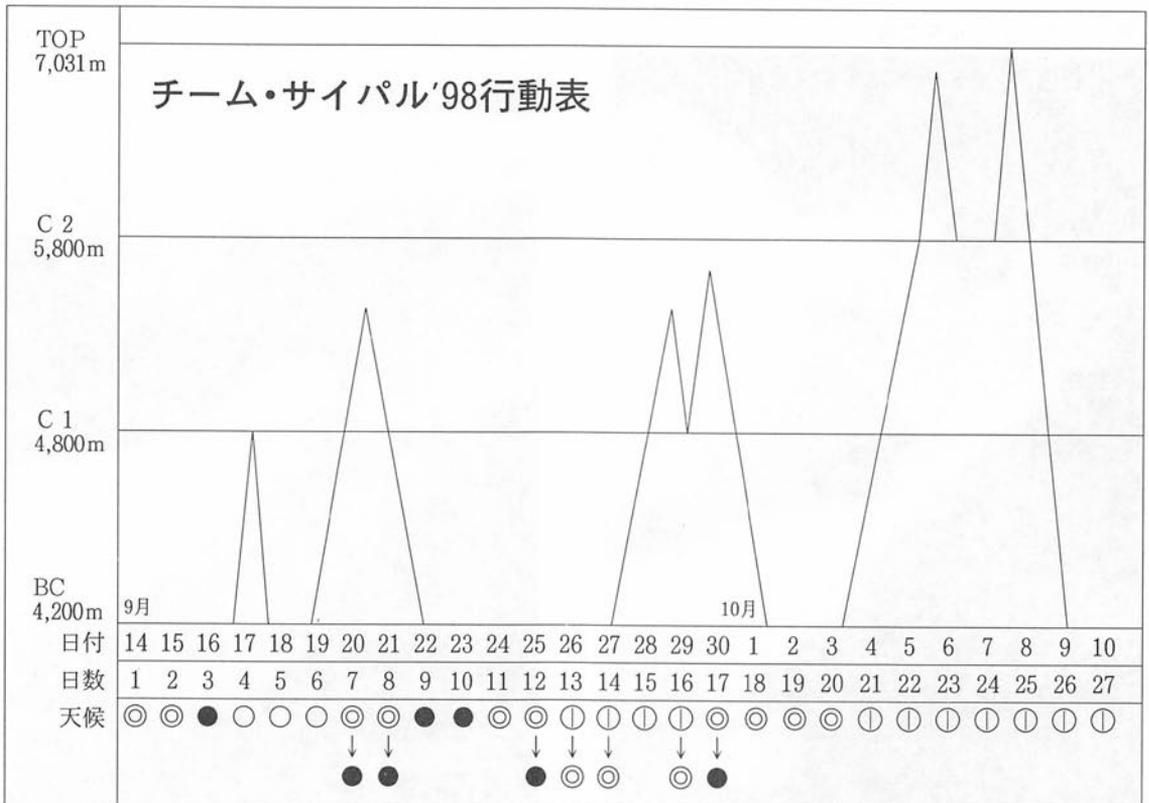
▼西ネパールの山々



あまりの寒さの為又、私のカメラは作動しない。強風の中、飛ばされる旗に苦労しながら岩崎氏のカメラで写真だけを撮り、すぐに下降に入った。

夕方、C2では、登頂を逃した古谷が食事を作り私達を迎えてくれた。彼は2年前も私と行ったチュルーで頂上を逃していたため、今回の彼の悔しさがよく解る。

10月8日 C2より荷物を満載しBCへと戻る。途中の固定したロープ(8本中、2本回収が出来



なかった。)赤布も回収した。

C1から更に増えた荷物に喘ぎながら下る。途中のアブレーション・バレーまでスタッフ、L0までが出迎えに来ており、本当にいい仲間に恵まれた事を実感した。

BCへ戻ると楽しみにしていたチャンは入手出来なかったらしく、代わりに中国製パイチューウが用意されていた。久しぶりの美酒で乾杯。

帰路キャラバン

10月10日～ シミコットへ向けてのキャラバン。チャラのポーターを5人雇い、BCを後にした。

登山隊の少ないBCは、僅かなゴミも目立つため、撤収には非常に神経を使った。

シミコットまではチャンを飲みながらのキャラバンである。途中で食べる新鮮な野菜が美味しい。

シミコット到着後は浴びるようにチャンを飲みまくり、前後不覚に陥った。

10月13日、14日 シミコットよりネパール・ガンジまで飛行機で移動。

窓から見える風景は長いキャラバンを思い起こさせ感慨深いものがあった。

インド国境まで7km、タライ平原の街ネパール・ガンジは標高100mで非常に暑い。あっという間の文化、気候の変化に戸惑いを感じながら、美味しいダル・バート、久しぶりのマス(肉)、ビールに舌鼓をうった。

14日、ローカルバスの夜行便をつかまえカトマンズへ戻った。

▼チベット、ナムナニ峰



▼頂上に立つ岩崎隊員



おわりに

サイパル山群は小じんまりとした山群であった。上部から見る他の西ネパールの山々も同じ印象である。そういった意味で、やはり7、8,000mを多く抱える他の山域と比べ地味であるといえる。しかし、今回の遠征は本当に楽しかった。それは登山もさることながら、この長いキャラバンを通して「古き良きネパール」を感じる事が出来たからだと思う。

又、気心知れた良きメンバー、文句ひとつ言わず最後まで行動を共にしたL0、今回で私との遠征も5回目となるデビラム、非常にまじめで賢いディビ・ライなど素晴らしい仲間、スタッフと共にやり遂げる事が出来たからだと思う。

野沢井、岩崎の2人はこのサイパル登山の後、某登山学校の講師としてクーンブ・ヒマラヤのポカルデ・ピークへ出かけた。この山のアプローチ・ルートとなるエベレスト街道は、あまりのトレッカーの多さと、それに伴いどんどん進む観光地化の勢いに驚かされる。あまりにも西ネパールとのギャップの大きさに、このエベレスト街道に対して辟易してしまうのは、私達が擦れてしまったからだろうか？

しかし遠征が終わった現在も、どきどきするような新鮮な感動が残る、あの西ネパールの山旅の様な山行を続けていけたらと思う。

地域ニュース

《中国》

1998年日本隊一覧

山名	標高	派遣母体名	隊長名	人数	畷
チョモランマ	8848	昭和三岳会	小野寺 斉	11	○
〃		労 山	近藤 和美	12	○
〃		テレビ朝日	村口 徳行	3	○
〃		国際隊	R.ブライス	1	○
〃		ガイアAC	小西 浩文	1	×
〃		F.O.S	戸高 雅史	2	×
チャー・オユー	8201	谷口	谷口 正彦	2	○
ガッシャーブルムII	8035	立教大学	奥原 幸	6	☆
8隊 38人 登頂 10人					
ナムナニ	7694	JAC福岡	太田 五雄	4	○
ガンカル・ブンスム	7570	J A C	伊丹 紹泰	6	☆
ミニヤ・コンカ	7556	横断山脈	須藤 建志	5	×
ムスターグ・アタ	7546	栃木岳連	石澤 好文	22	○
〃		リコー山の会	中谷 正秀	6	○
〃		九 里	九里 徳泰	4	○
〃		岩 ・ 山	小野寺光義	2	○
〃		無名山塾	太田 昭彦	6	×
カンベンチン	7281	愛媛大学	山本 武	6	○
ニンチン・カンサ	7206	H A J	関根 幸次	9	●
無名峰(チベット)	7100	京都岳連	栗飯原一成	7	×
11隊 77人 登頂 30人					
ロンライ・カンリ	6859	同志社大		4	×
カバン	6717	H A J	山森 欣一	3	☆
無名峰(チベット)	6340	大 分	興田 勝幸	5	◎
〃 (〃)	6235	スピダニー	坂原 忠清	4	◎
4隊 16人 登頂 8人					
ブーダ・カンリ	5964	明星学園		26	◎
蓮花夕照連山	5704	労 山	山岡 人志	3	◎
2隊 29人 登頂 23人					
合 計	25隊 160人 登頂71人				

(注) ☆は偵察隊、カンベンチンは北峰初登頂。

《ネパール》

1998年秋日本隊一覧

山名	標高	派遣母体名	隊長名	人数	畷
サガルマータ	8848	S S 関西	松本 恵親	6	×
〃	〃	亜細亜大	野口 健	4	×
マカルー	8463	埼玉岳連	福田 靖	7	×
〃	〃	山 童 子	小野 一太	4	×
ダウラギリI	8167	札幌山岳	斉藤 勤	7	○
〃	〃	境町山の会	吉田 直人	6	×
マナスル	8163	秋田海外	丸山 芳雄	8	×
〃	〃	日本登攀C	山野井泰史	2	×
ギャチュン・カン	7952	大阪鋭峰会	城 隆嗣	5	×
アンナプルナIII	7555	きんたろう	石井 清	1	×
ブモ・リ	7161	大阪労山	林 孝治	4	○
サイバル	7031	バーバリアン	野沢井 歩	3	○
グルカルボ・リ	6891	北海道大	樋口 和生	11	×
アマダブラム	6812	B. S. R	篠原 建郎	5	○
カンデ・ヒウンチュリ	6627	大阪山の会	吉永 定雄	12	×
合計 15隊 85人 登頂14人					

トピックス

HAJ 第7回中国登山研究会

恒例の「中国登山研究会」は、中国登山の受け入れ窓口である「中国登山協会」の張江援交流部部長と楊世涛副部長、趙建軍副部長、趙玲々職員の名を迎えて下記のとおり開催します。

記

主催：日本ヒマラヤ協会

日時：1999年2月7日(日) 9:10~16:30

場所：豊島区民センター ☎03-3984-7601

豊島区東池袋1-20-10 池袋東口徒歩5分

会費：3000円(資料代含む)

郵便振替 00100-6-48954

加入者名 日本ヒマラヤ協会

内容：「中国の山々と登山」 張 江援 団長
 「ニンチン・カンサ登頂」 HAJ'97~'98隊
 「知られざるジューロン谷の山々」 HAJ隊
 「3週間で行けるヒマラヤ」 事務局
 質疑応答/情報交換

申込みと問い合わせ先

〒134-0013 豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

☎ 03-3988-8474

日本ヒマラヤ協会 FAX 3988-8502

仙台 中国の山々—名山からヒマラヤまで

東北海外登山研究会の主催で、中国登山協会代表団を迎えて下記のとおり開催される。

記

日時：1999年2月11日（木・祝日 13時～14時半）

場所：河北新報社新館2F見学者ホール

仙台市青葉区五橋1-2-28

会費：500円（資料代として）

内容：名山として名高い「中華五岳」の紹介

東北地区からの中国領ヒマラヤ登山隊報告

問い合わせ先：〒981-0933 仙台市青葉区柏木

1-9-35メープル仙台内

八嶋寛：☎022-299-5335 FAX 022-296-0681

※尚、2月10日（水）午後6時から青葉区役所内にて代表団（張江援団長ら4名）歓迎会を行う。

都岳連 高所順応研究会の開催

本研究会は国内唯一の「高所順応」をテーマとした研究会です。ヒマラヤ登山を目指す方だけでなく、トレッキングを計画中の皆様にも是非ご参加お願い致します。

主催：東京都山岳連盟・海外委員会

日時：1999年2月28日（日）9：00～17：00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

小田急線参宮橋下車 徒歩5分

参加費：3000円（昼食は各自でお願い致します）

申し込み方法：参加申し込み書に参加費を添えて都岳連事務局まで現金書留で送付、FAXでも受け付けます。

申し込み・問い合わせ：

〒104-0031 東京都中央区京橋1-9-9

湘南産業八重洲ビル401

東京都山岳連盟 事務局（月曜～金曜、午後1時～5時）

TEL 03-5524-5231 FAX 03-5524-5232

研究会内容（予定）：

高所順応の基礎知識

高所障害の実例と対処

高所登山、酸素使用の有効性と危険性

CD-ROM

母なる大空への回廊

冬期エベレスト南西壁ルート初登頂の記録

1993年12月、エベレストの最難ルートとして知られる南西壁より登頂に成功した群馬岳連隊の成果は、ヒマラヤ登山の歴史に残る偉業である。しかし、残念ながらその事を正しく理解していない我が国の山岳関係者も多く、他国のヒマラヤニストの中にもこの事実を知らない人々も見受けられる。残念な事だ。

群馬岳連はどの遠征においても常に大冊の報告書を出版、貴重な記録や報告を残している。そして今回の冬期南西壁の場合には新聞社が後援に付いた事もあって「厳冬のサガルマータ 究極の挑戦 南西壁」大判の写真集、「母なる大空」登山報告書、そしてビデオが発売されている。そしてさらにこの度、登山隊のものとして我が国では初めて、「母なる大空への回廊」がCD-ROMとして発売されたので紹介したい。

CD-ROMといっても馴染みの無い人も多いかもしれない。すっかりレコードに取って代わって久しいコンパクトディスクに、写真や活字ももちろん音楽が組み込まれたもので、そうした資料をスムーズに見るためのプログラムも組み込まれている。したがってこれを楽しむためにはコンピューターが必要となる。

さて、このCD-ROMを起動すると音楽とともに印象的な9カットの映像が移動して画面を埋めたところでタイトルが現れる。期待させるオープニングだ。次に現れる画面には3種類（地図・登山行程を見る・ネパールちょっとのぞきみ）の選択肢（コース）をあらわす窓（ウインドウ）が現れる。ここでは紙面の都合上「登山行程を見る」を選択（クリック）する。そして1993年のプレ登山として行なったチョー・オユ編、そしてエベレスト編、隊員紹介と計画概要、地図の5つの窓である。エベレスト編を選択すればそこには失敗した91～92年隊、カトマンズを出発してから登山を終了するまでが5つのセッションに分かれてお

り、自分のみみたい部分からスタートする事が出来る。これがビデオとの違いだ。どれでも選択すれば音楽がはじまり印象的な写真とその日その日を解説する文字が表示される。画面右下の次へのマークを選択すれば次々と画面が変わり、登山の展開を追って行ける。また、「戻る」を選択すればセッションの選択の画面に戻れる。(ここから「戻る」を選ぶと更に前の画面に戻れる。)各セッションは多くの写真とビデオ(音声付)が挿入されており、臨場感がある。たとえばセッション1はカトマンズ空港を飛び立つビデオで終わり、セッション4には3次隊の登頂シーン(ビデオ)の前には登頂の瞬間のトランシーバーでの交信がながれ(解りやすい様に活字でも表示される。)登頂者の興奮が伝わってくる。1次、2次、3次の各登頂時でトランシーバー交信の模様を聞くことができるがヒマラヤを知る人なら尚のこと、心に迫るものがある。これはCD-ROMならではだ。報告書やビデオを持っている人でも買って損をした気分にはさせない。

登山の専門用語(シェルパ、トラバース他)など赤く表示された単語の上にカーソルを移動すると?があらわれ、選択すればその単語の説明があらわれる。画面の位置をもっと理解したいときにも画面右下に地図や写真を表示する窓があり選択すると適当な地図や写真が表示され、理解の助けになる。ヒマラヤの初心者にも理解しやすい様に配慮されている。

活字離れがさげばれて久しい。ヒマラヤ登山も多くの人達のものとなった今、このような方法で自分たちの実践してきた登山を紹介することも必要なことかも知れない。冬期エベレスト南西壁という日本人が行った歴史的な登山が、こうして多くの人々の目や耳に触れる機会が増えることは大変に良いことだと思う。ここで紹介した以外にも多くの工夫やアイデアが盛り込まれており見るものをあきさせない。また全体を通して実に丁寧、親切に作られておりCD-ROMとして質が高く、登山の経験の無い人でも楽しめる内容になっている。(象も唸り声をあげて登場するゾウ!)

日頃、お父さんのやっている事に関心を示さな

い子供たちと楽しいひとときを提供してくれるかもしれない。(中川裕)

OS:Windows95/98対応、メモリー:20MB以上
(32MB以上推奨)

企画・制作 Mediaくれおーる

協力:スポーツニッポン新聞東京本社

アドバイザー:尾形 好雄

定価:6800円

連絡先:メディアくれおーる ☎ 03-5373-7307

FAX 03-5373-7304まで

BOOKS

鎮魂の嶺 BROAD PEAK

静岡市山岳連盟が1997年ブロード・ピークに派遣した登山隊の報告書。雪崩のため隊員2人が死亡した。登山隊の成立から現場の模様まで詳細に報告されている。ヒマラヤ登山への取り組み方としては、最近みられるような一気に八千メートル峰を狙うのではなく、6千、7千と経験を積みながら時間をかけて憧れの八千メートル峰のブロード・ピーク挑戦となったのである。しかし、そのような真摯な取り組み方をしているにもかかわらず遭難が発生したのである。ここに自然の大きさを思い知らされる。テイクイン、テイクアウトの報告は参考になる。このようにヒマラヤ登山に真摯に取り組んだ隊の隊員たちの経験は、次に必ず花開くはずである。総隊長は「いつの日か機会を作り再度挑戦することが、亡き2人の希望するところであろうと思う。」との言葉で挨拶文を締め括っているが、あせらずにその日が実現することを祈りたい。(山森欣一)

B5判 カバー付き 244頁(内カラー20頁)

1998年11月30日刊

〒420-0834 静岡市音羽町10-8 原田表装店内
静岡市山岳連盟 ☎ 054-246-7536

トゥージェ峰(6148m)初登頂

インド・ラダック地方南東部ルブシュ地方の盟主トゥージェ峰の初登頂報告書が、登頂からわずか2ヶ月半後に発刊された。

1994年にこの地が外国人へ開放されるのを待って一番乗りを果たしたのが、今回の登山隊長沖允人氏一行であった。97年冬には同山域の偵察も行っているが、厳冬期のこの地域への入域も外国人としては初めてと思われる。氏を始めとする関係者の一連の努力の成果が、トウジェ峰初登頂となった。

隊の年齢構成を見ると、最近の登山隊やトレッキング・グループ同様、登山隊は23歳から66歳と幅広いものの平均年齢は58歳、また同行した探査隊も46歳から72歳で平均年齢52歳の高齢隊である。しかし、この隊には昨今の中老年グループとはヒト味違う何かを感じる。エージェントお任せのヒマラヤ登山全盛の中であって、年齢を考慮しながら今なお若き時代からの「未知・未踏」の山登りにこだわり続けている中京山岳会隊には心から拍手を送りたい。

沖氏の編集後記にある「ガイドブックを確認するような登山や探査よりも、訪れてみるといたした山や風景ではないことがあっても、それを見極

めるということがパイオニア・ワークというものである」の一文には、共感を覚える。

参考文献としての報告書というより、カラーの資料や写真を多用した読みやすい冊子である。

(寺沢玲子)

A 4半 44頁 1,500円(送料込み)

連絡先：〒461-0011 名古屋市東区白壁2-3-3、
A-4 織田善夫方
〒326-0808 足利市本城3-3905-7-703
沖 允人方

■財政支援：宮崎久夫5万円

東京集会のお知らせ

日時 1月25日(月)午後7時～
内容 新年会です
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN

岳人

毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円です。送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年

特集

- | | |
|-------|--------------------|
| ★ 1月号 | 雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳を登る |
| 2月号 | 再発見・八ヶ岳 森の逍遥から氷瀑まで |
| ★ 3月号 | 魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰 |
| 4月号 | 残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて |
| ★ 5月号 | 新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山 |
| 6月号 | 南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ |
| ★ 7月号 | 花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊 |
| 8月号 | 幽遠の黒部渓谷、岩壁、源流、高原へ |
| 9月号 | 森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高 |
| ★10月号 | 南会津と奥美濃、山里の魅力も探る |
| 11月号 | 秋深い奥秩父と西上州 その山と人 |
| 12月号 | 岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ |

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
東京本社 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

日本隊によるヒマラヤ高峰初登頂

(7,000m以上のピークを対象)

山森 欣一

1956年マナスルに初登頂して以来、ヒマラヤ登山における日本隊の活躍はめざましい。しかし40年も過ぎた現在では、一体どのような登山隊がどのような活躍をしたのか全貌もおぼろげになる。

ここでは、7,000メートル以上の峰に初登頂した隊を整理してみた。しかし、中には当事者が初登頂と発表しても部外者から物の言いがついたケースもあり、独断で整理した。

(注) 派遣母体の※印は外国との合同隊

1998年12月31日現在

番号	年	山名	標高	登頂年月日	派遣母体
01	1956	マナスル(Manaslu)	8163	1956, 5, 9	日本山岳会(JAC)
02	1958	チョゴリザ北東峰(Chogolisa NE)	7654	1958, 8, 4	京都大学(AACK)
03	1960	ノシャック(Noshaq)	7492	1960, 8, 17	京都大学(AACK)
04	1960	ヒマルチュリ東峰(Himalchli E)	7893	1960, 5, 24	慶應大学(Keio U.)
05	1960	アピ(Api)	7132	1960, 5, 10	同志社大学(Doshisha U.)
06	1962	サルトロ・カンリ(Saltoro Kangri)	7742	1962, 7, 23	京都大学(AACK)*
07	1962	チャムラン(Chamlang)	7319	1962, 5, 31	北海道大学(Hokkaido U.)
08	1963	バルトロ・カンリⅢ(Baltoro Kangri Ⅲ)	Ca.7300	1963, 8, 4	東京大学(Tokyo U.)
09	1963	サイバル(Saipal)	7031	1963, 10, 21	同志社大学(Doshisha U.)
10	1964	ギャチュン・カン(Gyachung Kang)	7952	1964, 4, 10	長野県山岳協会(Nagano M.A.)
11	1964	アンナプルナ南峰(Annapurna S)	7219	1964, 10, 15	京都大学(AACK)
12	1964	タルケ・カン(Tarke Kang)	7193	1964, 10, 16	千葉県山岳連盟(Chiba M.A.)
13	1965	ゴジュンバ・カンⅡ(Ngojumba Kang Ⅱ)	7646	1965, 4, 23	明治大学(Meiji U.)
14	1967	ランガール・ゾム南東峰(Langhar Zom SE)	7061	1967, 7, 25	新潟大学(Nigata U.)
15	1967	サラグラール南峰(Saraghrar S)	7308	1968, 8, 24	一橋大学(Hitotsubashi U.)
16	1969	グルジャ・ヒマール(Gurja Himal)	7193	1969, 11, 1	富山ヒマラヤ登山隊(Toyama)
17	1970	ダウラギリⅥ(Dhaulagiri Ⅵ)	7268	1970, 4, 17	関西登高会(Kansai A.C)
18	1970	ガディ・チュリ(Ngadi Chuli)	7871	1970, 10, 19	大阪大学(Osaka U.)
19	1970	チューレン・ヒマール(Churen Himal W)	7371	1970, 10, 28	静岡大学(Shizuoka U.)
20	1975	ダウラギリⅤ(Dhaulagiri Ⅴ)	7618	1975, 5, 1	岡山大学(Okayama U.)
21	1975	ダウラギリⅣ(Dhaulagiri Ⅳ)	7661	1975, 5, 9	大阪府山岳連盟(Osaka M.A)
22	1975	カンピレ・ディオール(Kampire Dior)	7168	1975, 7, 14	広島山の会(Hiroshima Yamano Kai)
23	1975	マルビディン中央峰(Malubiting C)	7260	1975, 8, 2	日本山岳会岩手(JAC.Iwate)
24	1975	K12	7469	1975, 8, 4	市川山岳会(Ichikawa A.C.)
25	1975	テラム・カンリⅠ(Teram Kangri Ⅰ)	7464	1975, 8, 10	静岡大学(Shizuoka U.)
26	1976	アプサラサスⅠ(Apsarasas Ⅰ)	7245	1976, 8, 7	大阪大学(Osaka U.)
27	1976	シンギ・カンリ(Singhi Kangri)	7202	1976, 8, 8	東北大学(Tohoku U.)
28	1976	シェルピ・カンリ(Sherpi Kangri)	7303	1976, 8, 10	神戸大学(Kobe U.)
29	1976	スキャン・カンリ(Skyang Kangri)	7357	1976, 8, 11	学習院大学(Gakushuin U.)
30	1977	ヌプツェ北西峰(Nuptse NW)	7742	1977, 5, 11	登歩溪流会(Toho Keiryu Kai)
31	1977	ウドレン・ゾム中央峰(Udren Zom C)	7080	1977, 8, 10	茨城大学(Ibaraki U.)
32	1978	ヒマルチュリ西峰(Himalchuli W)	7540	1978, 5, 7	雪と岩の会(Yukitoiwano Kai)

番号	年	山 名	標高	登頂年月日	派 遣 母 体
33	1978	バトゥラⅢ(Batura Ⅲ)	7729	1978, 7, 6	日本ヒマラヤ協会 (HAJ)
34	1978	バスー東峰(Pasu E)	7295	1978, 7, 2	防衛大学校 (Self Defense C.) *
35	1978	ガネッシュ・ヒマールⅣ(Ganesh Himal Ⅳ)	7110	1978,10,20	日本勤労者山岳連盟 (JWAF)
36	1979	ランタン・リルン(Langtang Lirung)	7225	1978,10,24	大阪市立大学(Osaka City U.) *
37	1979	クンヤン・チッシュ北(Kunyang Chhish N)	7108	1979, 7,11	北海道大学(Hokkaido U.)
38	1979	プマリ・チッシュ(Pumari Chhish)	7492	1979, 7,15	北海道山岳連盟(Hokkaido M.A)
39	1979	ラトック I (Latok I)	7145	1979, 7,19	京都カラコルムクラブ(Kyoto)
40	1979	テラム・カンリⅢ(Teram Kangri Ⅲ)	7382	1979, 8, 4	弘前大学(Hirosaki U.)
41	1979	ルプガール・サール中央(Lupghar Sar C)	Ca7200	1979, 8, 4	法政大学(Hosei U.)
42	1980	ガネッシュ・ヒマールⅢ(Ganesh Ⅲ)	7052	1979,10,19	岡山大学(Okayama U.) *
43	1981	ジュトマル・サール(Yutomaru Sar)	7330	1980, 7,22	東京志岳会(Tokyo Shigaku Kai)
44	1982	ランタン・リ(Latang Ri)	7205	1981,10,10	日本ヒマラヤ協会(HAJ) *
45	1982	カンペンチン(Kangpenchin)	7281	1982, 4,21	京都大学(AACK)
46	1982	ポーロン・リ(Porong Ri)	7292	1982, 5,17	大分県山岳連盟(Oita M.A)
47	1983	ハチンダール・キッシュ(Hachindar Chish)	7163	1982, 8, 4	金沢大学(Kanazawa U.)
48	1984	ネムジュン(Nemjung)	7139	1983,10,27	弘前大学(Hirosaki U.) *
49	1984	ウルタル I (Ultal I)	7329	1984, 7,28	広島山岳会(Hiroshima A.C.)
50	1985	マモストーン・カンリ(Mamostong Kangri)	7526	1984, 9,13	日本ヒマラヤ協会(HAJ) *
51	1985	ナムナニ(Naimona' nyi)	7694	1985, 5,26	京大(AACK)/同大(Doshisha U.) *
52	1986	マラグッティ・サール(Malangutti Sar)	7026	1985, 8,13	東京志岳会(Tokyo Shigaku Kai)
53	1986	クーラ・カンリ I (Khula Kangri I)	7538	1986, 4,21	神戸大学(Kobe U.)
54	1986	ニェンチェンタンラ(Nyaiqentanglha M)	7162	1986, 5, 8	東北大学(Tohoku U.)
55	1986	pt.7167(Kun Lun Range)	7167	1986, 8,16	東京農業大学(Tokyo Agri.U.)
56	1986	チョー・アウイ(Qowoyat)	7354	1986,10,12	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
57	1986	カルジャン(Karjiang)	7216	1986,10,14	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
58	1986	ギャラ・ペリ(Gyala Peri)	7294	1986,10,31	日本ヒマラヤ協会(HAJ)
59	1987	ラブチェ・カン主峰(Labuche Kang M)	7367	1987,10,26	日本ヒマラヤ協会(HAJ) *
60	1988	カント(Kangto)	7055	1988, 3,24	同志社大学(Doshisha U.)
61	1988	リモ I (Rimo I)	7385	1988, 7,28	日本ヒマラヤ協会(HAJ) *
62	1989	スークァン・リ(Siguang Ri)	7308	1989, 4,21	大阪市立大学(Osaka City U.)
63	1992	ヒムルン・ヒマール(Himlung Himal)	7126	1992,10, 3	北海道大学(Hokkaido U.)
64	1992	ナムチャ・バルワ(Namjag Barwa)	7782	1992,10,30	日本山岳会(JAC.) *
65	1993	ピラミッド・ピーク主峰(Pyramid Peak M)	7123	1993, 4,24	日本ヒマラヤ協会(HAJ) *
66	1993	クラウン(Crown)	7295	1993, 7,22	日本山岳会・東海(JAC.Tokai)
67	1994	アク・タシ(Aq Tash)	7016	1993, 8, 6	広島山岳会(Hiroshima A.C) *
68	1994	チリン(Ciring)	7038	1994, 7,19	岐阜大学(Gifu U.)
69	1994	トゥインズ(Twins)	7350	1994,10,31	日本登山隊(Japan Sikkim)
70	1995	マナ北西峰(Mana NW)	7092	1995, 8,18	山形海外交流協会(Yamagata Kaigai A.S) *
71	1995	ニェンチェンタンラ南東峰(Nyaingentanglha SE)	7046	1995, 8,22	中津川勤労山(Nakatsugawa W.A.C)
72	1996	ウルタルⅡ(Ultal Ⅱ)	7388	1996, 7,11	日本山岳会・東海(JAC.Tokai)
73	1998	カンペンチン北峰(Kangpenchin N)	7230	1998, 8,31	愛媛大学(Ehime U.)

1999年インドの主な祝祭日

期 日	名 称	内 容
☆ 1月 1日(木)	New Year's Day	元旦
14日(水)	Makara Samkaranti/Pongal /Makradi Sanana	ボンガル(収穫祭)。太陽が北半球に入る。
20日(水)	Idu'l I Fitr(Ramazan Id)	イスラム断食月ラマザンの終わり。
22日(金)	Vasant Panchami /Sri Panchami	春の始まりを祝う北東インドの祭。サラスワティ女神を祀る。
☆ 26日(月)	Republic Day	共和制記念日(1950年インドが共和国となる)
2月14日(日)	Maha Shivratri	シヴァ神が祀られ、信者は1日断食する。
3月 3日(水)	Holi	ホーリー、クリシュナ神を祀る。人々は年齢、カースト、宗教を問わず、色水をかけあう。
20日(土)	Gangaur (Gouri Tritiya)	ガウリ女神を祀るラジャスタンの祭。
☆ 29日(月)	Idu'z Zuha(Bakrid) Mahavira Jayanti	予言者アブラヒムが息子を生贄にした記念。 ジャイナ教開祖マハビーラ生誕祭。
☆ 4月 2日(金)	Good Friday	キリスト受難祭。
14日(水)	Vaisakhi	ヒンドゥ暦の元旦。パンジャブ地方の祭。
☆ 27日(火)	Muharram	イスラム暦の新年。イスラム教シーア派の哀悼の儀式。
☆ 30日(金)	Buddha Purnima	釈尊生誕祭。
☆ 6月27日(日)	Milad-un-Nabi	予言者モハメッドの生誕祭。
7月14日(水)	Car Festival(Ratha Yatra)	オリッサ、ベンガル、グジャラート、タミルなどでジャガンナート神を祀る。
☆ 8月15日(日)	Independence Day	独立記念日(1947年独立)。
25日(水)	Onam	ケララの収穫祭。
26日(木)	Raksha Bandhan	ラッキー。ヒンドゥの姉妹達は兄弟達の手首に神聖な紐を結び、兄弟達を悪から守る。
9月 3日(金)	Janmasthan(Vaisnava)	クリシュナ神生誕祭。
13日(月)	Ganesh Chaturthi /Vinayaka Chaturthi	学問と繁栄の神ガネッシュを祀る。
☆10月 2日(土)	Gandhi Jayanti	マハトマ・ガンジー生誕記念日。
16日(土)	Durga Puja(Maha Saptami)	
18日(月)	(Maha Ashtami)	ドゥルガ・プジャ。ベンガルではドゥルガ女神を祀る。
19日(火)	(Maha Navami)	
☆ 19日(火)	Vijaya Dasami/Dussehra	ダサラ。ラーマ神が魔王ラーバナに勝利した事を祝う。
☆11月 7日(日)	Diwali	デワリ。ヒンドゥ教の新年。ヴィシュヌの妃神・富の女神ラクシュミーを迎える光の祭。
☆ 23日(火)	Guru Nanak Jayanti Pushkar Fair	シーク教開祖ナナク生誕祭。 アジメール地方プシュカル湖で開かれるラクダ市。
☆12月25日(土)	Christmas Day	キリスト生誕祭。

☆インド大使館休館日。インドは太陰暦のため祝日は毎年変わる。

9-8 チョモラーリ (綽莫拉日・Qomo Lhari)

- * 山脈：ヒマラヤ山脈。
- * 位置：ラサ (3,658m) の南西267.5km。
[27° 80' N. 89° 20' E]
- * アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはシガツェからギャンツェを経てタン・ラ(4,500m)を越えてBC(4,700m)まで約510km、ジープで1日半の距離。
- * ルートの所要日数：96年南稜から登頂した日中合同隊は、8月17日にBCを建設し、キャンプ3つを出して9月8日に初登攀した。
- * 山の概念：主峰7,326m。主峰の北北東3kmにジョモ(6,972m)、北東6.8kmにタンガヨウラ(ブータン名はジチュ・ダケ)があり、最新の中国側地図では6,662m。また南西にコルを挟んで6,036mの尖峰がある。中国とブータンの国境線上にあるが、中国側は岩稜に支えられた三角錐状。
- * 通常の登山時期：春、秋
- * 山名：別名パーリ・チャオム。レプチャの人達によってリミート・リムサ・チュとも呼ばれていたともいわれる。チョモラーリとはチベット語で「女神の神聖な山」の意。チベット人は西側のパウフンリを「仙人の峰」といい東のチョモラーリを「仙女の峰」と呼んで信仰の対象としている。チベットでは西のカン・リンポチュと並ぶ聖山である。
- * 小史：1995年秋、日中合同の偵察隊が入山。96本隊が9月8日初登頂に成功した。なお、ブータン側から2度登頂した記録がある。
- * 参考文献：「[女神の山 チョモラーリ] (長野県山岳協会) 1996年11月25日刊]

登山の概要

■主峰 (7,326m)

1995年

8月～9月 偵察隊 日中合同隊

[中国側隊長：王鳳桐(55) 張江援(42) 羅申

(28) 日本側隊長：田村宣紀(55) 宮本義彦(50) 鮎沢政文(31) 村田彰(40) 東野良(51)]
[曠野に座する仙女の峰 チョモラーリ (東野良) 山と溪谷725号 1995年12月号]

1996年

8月～9月 南稜 日中合同隊

8月17日西面4,700m地点にBC設営。8月19日5,300m地点にC1設営。26日コル6,000m地点にC2設営。8月31日～9月3日降雪のためBCへ撤退。9月5日南稜上6,850m地点にC3を出し、8日羅申、開村、丹增多吉、協力員の大斉米(39)、日本側の山田、平塚、松谷、鮎沢、米山、高橋が初登攀に成功。山頂はガス、雪で眺望なし。10日にも桂桑、吉吉、加措、協力員の嘎亞(45)、普布(31)、小斉米(32)、加拉(34)、多布吉(34)、日本側の宮本、洞井、三尾、田中、加藤、東野、斎藤が登頂に成功した。

[中国側隊長：張江援(43) 王鳳桐(62) 趙建軍(41) 成天亮(55) 羅申(33) 桂桑(39) 開村(32) 丹增多吉(34) 加措(36) 吉吉(25) 日本側隊長：宮本義彦(52) 田村宣紀(56) 山田誠(39) 平塚章(45) 三尾敦(32) 加藤幸彦(63) 洞井孝雄(46) 田中伸作(36) 松谷拓也(24) 清水公男(30)]

[(報道) 中国側：多吉占推 郭思

日本側：鮎沢政文(32) 東野良(52) 村田彰(40) 米山悟(32) 高橋克昌(26) 斎藤文彦(29) 伊賀上賢司(32)]

[女神の山「チョモラーリ峰」全員登頂 (長野県山岳協会) 山岳第九十二年 1997年12月5日刊 仙女の峰 チョモラーリに抱かれて (宮本義彦) 山と溪谷737号 1996年12月号 「仙女の峰」チョモラーリ峰 (長野県山岳協会) チョモラーリ登山隊 岳人594号 1996年12月号]

■ 寸 感 ■

登山時報287号(1999年1月号)に「成功率と安全性を高めるために」と題する労山海外委員近藤和美氏の覚え書が載っている。ヒマラヤ登山における留意点を氏の30回に及ぶ高峰登山からまとめられたものである。一読して非常によくまとめられていると思った。HAJでは、これまでも「事故対策研修会」の資料として似たようなことを何度も載せている。

高峰登山の実践者は数多くいるが、その人々の体験が一つに集約されることは少い。どうしても個人の体験としてせいぜい研究会や飲み会の席上で話されてどこかに消えてしまうことが多い。

一つには「近藤覚え書」のようなものに「肉」をつけて「基本集」を作ること。二つには、「準遭難」も含めた「事故事例集」を作ること。三つには、それらを引用した「生と死の分岐点」的な解説書を作ることが「自己責任」の世界であるヒマラヤ登山から事故を減らす道であると思う。そのためにも山岳団体による機構が必要である。(山森)

事務局日誌(12月)

- 2日(水) HAT-Jとテイクイン、テイクアウトについて協議(ルーム)
- 8日(火) ポカラ国際山岳博物館連絡協議会(JMA、山森)
- 14日(月) 中国登山協会代表団歓迎会&サヨナラ案内状発送
- 21日(月) 東京集会(24名)
- 25日(金) 仕事納め(1月5日まで)

ヒマラヤ No.327 (2月号)

平成11年1月10日印刷 11年2月1日発行

発行人 稲田定重

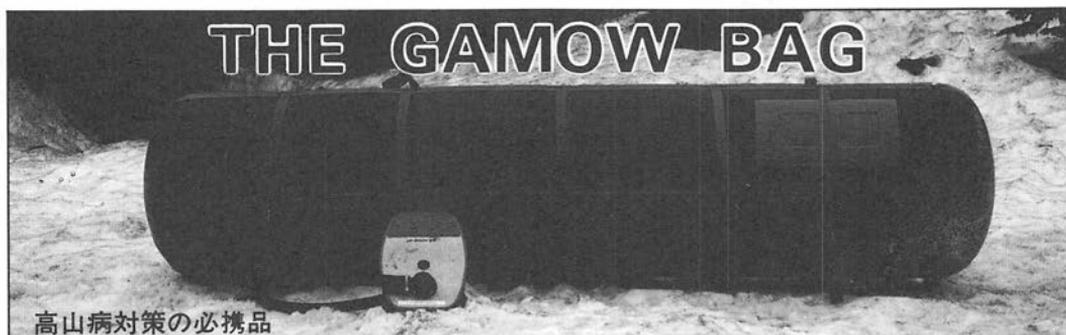
編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテンラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高み



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(64)15707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004